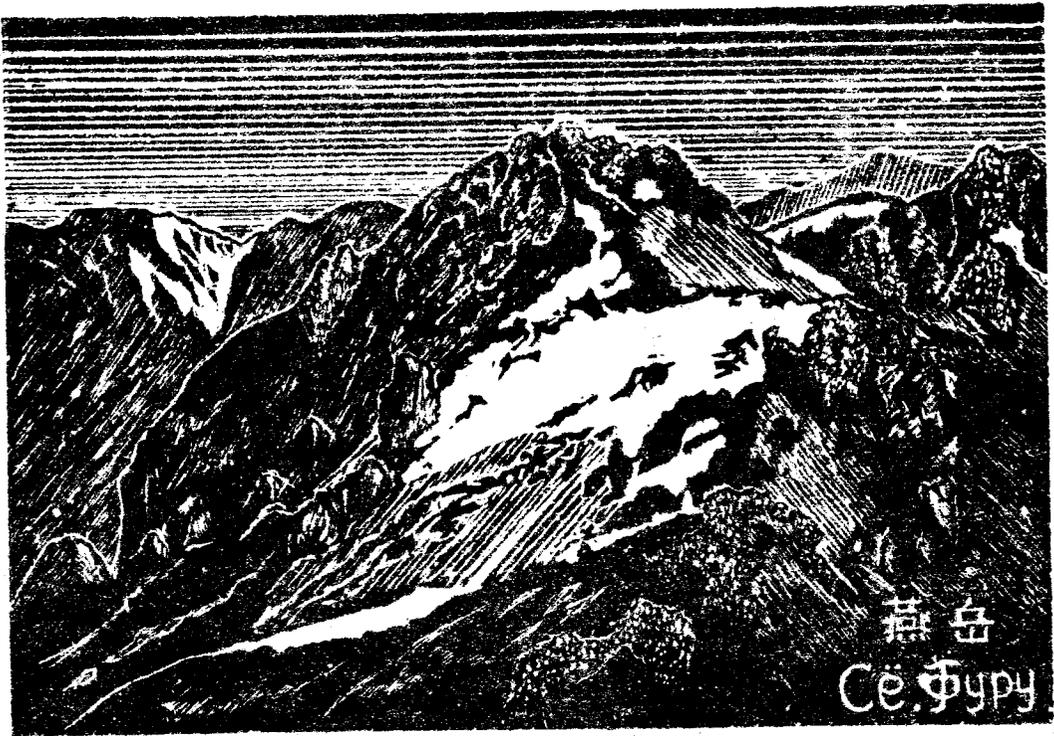


志 ぶ 志

号 二 号



燕岳
Се.Фурь

もくじ

33	あとがき
30	ナカレ(雪崩)について
28	トリース — 妙高にて
23	私のお正月
22	康田さんの事
21	うた(百姓娘)
21	昨日の秋
20	おわかれの記
15	唐松岳 — 五箇岳正月山行
13	正月山行をふりかえって
12	なせ山に響るのか
8	うた(ハアルフス一万尺)
7	12月定例山行報告 — 妙高山 —
6	最近読んだ本
5	戸隠山 — 山行記録
3	権現 餅ヶ岳
1	妙高 — 火打 — 焼 縦走

古木博明
C.L 杉本敏宏
入村晶子
松岡健一
入村
八木真理子
杉本敏宏

妙高火打焼 縦走 22.11.3 11.4

パーティ 杉本 小倉 大島 山崎 池田

入村

朝、起きると空はいまにも雨が落ちそうな
天気なので気分勝水ずいこうか、いくまいか
迷う、それでも集合場所に行くかパーティの人
達かきていたので少しは気分が良くなる。

燕温泉につくと霧甲のためいやな天気だ
今日一日濡れるかなア……。しかし天気予
報によれば午前中は雨がふるが昼ごろには止
むという予報だったのでそのうちなんとかな
るだろうと思ひ、コウモリをさしながら登る
。女の定、登るに従つて雨から雲にかわつた
が途中から晴れてきた。そして、雲の切れ目
から燦々と注ぐ秋の太陽の光に木々の枝に
ついた水が輝き私はやはり山にきてよかつた
と思ふ。いや、この美しさをみるとまた山に
きたくなる。高谷池ビュッテで夕食の用意を
して歩いてふと辺りをみわたすと私は約想の世
界に足を踏み入れたのだらうか、霧のベール
につつまれて北アルプスの峰々が青色く浮び

上つてきた。右から白馬三山、唐松岳、五竜
岳、一際大きな鹿島槍、そして左の方に鋭い
穂先の槍ヶ岳、穂高連峰が見える。暫しの間
、立ちすくんでこの光景に湧水でいた、ふと
空を見上げると星が煌々と輝いてゐるではな
いか、孤独な口マンチストよ、君は何人と幸
福な人間であるうか、君は永遠にこの世界に
浸っていたいだらう。時間がこのまま止まれ
ば良いと思つてあらう。

ああ素晴らしいきがな登山よ、人生よ。

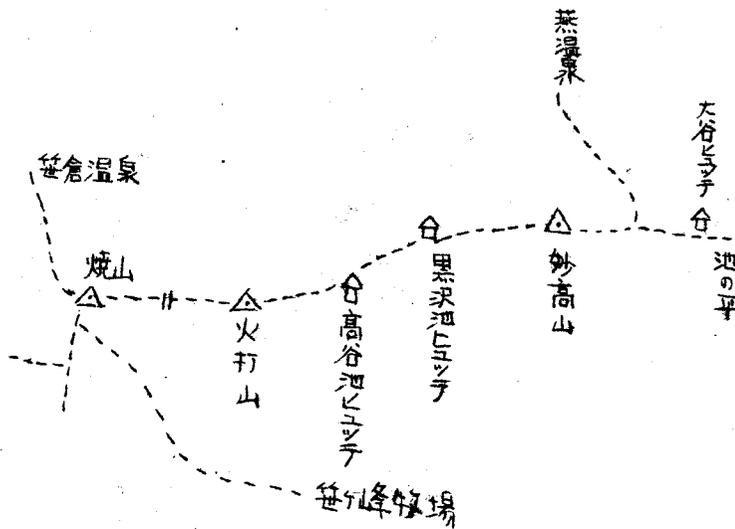
11月4日 朝食の後かたづけをしていると今
日の天気を約果しているかのように北アルプ
スが太陽の光を受けて輝きだした、さあ出発
だ、火打の頂きを目差して足取りも去日より
数段軽い、鬼が城入口附近で遠くを見渡すと
北、中央、南アルプス、そして富士山が見え
る。素晴らしい世界だ、こんな日は私の一年
の山行を通じて、そうぞらにはないだらう。
これが11月の山かと思ひながら夢心地で火打
から焼の頂きに来たが、現実の11月の山の。

世界に引きもどされたのは焼の下りである。太陽のあたつていない北側を降りて来た。冷たく風を被る。北側にひっぱりこもうと口を開けてまわっている。さあ元気をだせ、何をうつたえる必要があるうか、これが君の求めていた月の山ではないか、これを突破しなくては冬山だ、自分で自分を励まして一歩下る、そして下から今きた所をみあげれば「何んだ」こんな位の所でビクビクしていたのか、こんな岩でよくよしては厳冬期の北鎌、単独行をやることはできないぞと自分の心の弱さ、技術のなさにあきれた、あとは富士見峠で昼食をとり長い登山道を下って笹が峰のバス停についたのは16時30分でした。

反省。

- ・3日の夜はツェルトを張るべきであった。
- ・計画より時間があくられていた。もっと計画どうり行動すべきである。
- ・地形の読みとり、方位の読みとりができてない。

。夜、もっと山についてみんなと語りたかった。彼々は山に遊びに来たのではない、杉本氏の言葉によれば、彼々は自然によりしごかれにきたのではないか、ハイキングではないのだ登山なのだ。



権現・鉾ヶ岳 (芳次・小倉)

S. 48. 11. 17 (土)

TIME

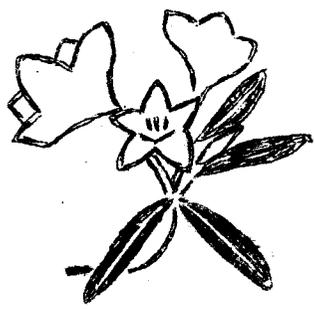
高田本所78分 (6:17) ↓ 直江津駅(6:33)
 17:08) 能生駅(7:32-7:48) ↓ 柵口バス停
 (8:25-8:45) ↓ 胎内岩屋(10:20-10:30) ↓
 権現山頂(11:10-11:15) ↓ イッヶ峰(12:15)
 ↓ 鉾ヶ岳山頂小屋(13:15-14:40) ↓
 大沢岳(15:00) ↓ 鳥道鉱泉(16:35-16:55)
 ↓ 鳥道バス停(17:15-17:40) ↓ 能生駅
 (18:02-18:09) ↓ 直江津駅(18:40-
 19:02) ↓ 高田駅(19:13)

高田を朝一番早いバスで直江津駅前にて下車
 7時の列車にて能生で下車するがいやなこ
 とに能はは雨が降っている。何だかガツカリ
 ここまで来たのにどうしようか迷い。バスが
 来たのでバスに乗って柵口にて下車した。
 雨はしどいに強くなっている。ここでも迷っ
 てしまいよし冒険をして見ようか。そんな気が

持になった。今日でこの山も3度目であり、
 だいたいわかる。バス停前の店屋で昼食用
 のラーメン2ケを買い入れ、名も知らぬおぼ
 さんが小生に声をかけた。おんた雨が降って
 るのに登るのか。いやめたほうがいよいよとい
 った。店屋の主人が「雨が降っていても登
 らなきゃ有名な登山家になれないぞ」とい
 笑った。登山者名簿に記入すると前のページ
 にこぶし山の会4名の氏名が書いてあり、9
 月の山行がある。日である。雨の中柵口を出
 発すると道が川のように水が流れていった。
 歩いて不思議なことに出合った。道の木た
 りに2ひきの魚がはねている。どうしてここ
 などここに？ 魚もつかまえ川へ投げたや、
 た。川原へ入るといよいよ権現の取り付、
 これから急斜面で大変、登って行くと最初の
 鏡場のとこに来た。ここから雨がみぞれに
 変わり、いくつかの鎖を登って胎内岩屋、この
 中で休憩さむくてかたかたふるえ、手が冷た
 くて夕バコもよくつかめない。胎内を出る時

に注意をしなければと思つていたが、右に頭
 を回すもぶつてしまつた。胎内を出ると、
 みぞれと風が強くなり鎖を登つてつぎはハヤ
 ミ岩下よりサツクを着けたままで這るのは少
 し無理な岩である。登つて行くと権理山頂直
 下付近から、二人とはみぞれから雪に変わった
 風が小生に強く吹きつけ多。登りきつて権理
 山頂、ここからハツケ峰へ行く途中にどうし
 たのかペーヌかかクニと落ちた足が思うよう
 に近まない朝めしを食べていないからだろう
 か。月のあたらないところでもパンを食べて又
 出発、少し行くと最後の鎖を登つてハツケ峰
 もうこの付近は15センチ以上も雪があり、
 ハツケ峰を通り、ささやぶの中を行くと、
 あれ！...、餅ヶ岳に入る道かわからなくな
 り、又トツケ峰まで戻り、道をたしかめて
 ゆからなくなつた付近で道をまがし、やごと
 見つけ何と餅ヶ岳の頂小屋まで一時間もかか
 づてしまひ、小屋へ入り火をたき、ぬれた物
 をかわかし、あつらいラーメンを食べ、4月に

来た時の二を思い出してしまつた。
 月の日も雨と月にやられたこと、そして今と
 同じにぬれ物もかわかしたんだ。た。
 外は風の音も静かになり下山の準備をして
 小屋を出ると火打、焼が白くなつてゐる。
 空を且上げると青空がもう天気は大丈夫だ。
 下山をいそぐ、大梁岳を2本の道になり、
 左は島道銀泉へ、右は彦冠方面に行く道だろ
 う。小生は左の道を下り、三重の巻を且なが
 ら銀泉へといそぐ。銀泉を出発するころから
 空はもう薄暗くなり走りようにして島道ハヤ
 亭に着いた時はもう真暗になつていた。



「戸隠山」山行記録

期日 12月 日 天候 晴れ

パーティ CL 桑原、杉本、小倉、木島、

古木、池田、八木、

コース、タイム

奥社入口(8、55)〜奥社(9、55)〜

五十岡長屋(10、40)〜(11、05)〜頂上(12、30)

頂上(12、30)〜奥社(12、55)〜奥社入

口(12、30)

十二月も中旬に入り一段と冷え込む日であ
ちこちでは氷がはり登山日和だった。だが長野に
入ると、どんよりとした重苦しい様な雲がか
かっていた。戸隠は私にとって始めての山な
のでとても不安だった。だがバードラインからの
北アルプスの峰々の眺めはすばらしく私の不
安を取り除いてくれるようであった。私は凡
庸ぞみた。だが山でひと汗かけばなんて軽い
気持ちで同行させてもらった。参道入口で身仕
度を整え、天まで送っているような杉の向を
抜け、一メートル以上もある雪を踏みしめて

奥社に向う、体調が悪いせい、目や今カチ

カして、めまいに見舞われ前進がややぶまれ

たが、行ける所まで行こうと決意し出発、行

く手には輪かんの跡があり、ラッセルを期待

していたのだがスムーズに前進する事ができ

た。金場の手前の登りも斜面が急でトラバ

スびみに登るが反対側は谷なので雪にさしこ

むビツケルにも一段と力かはいる。又鎖場で

も相当緊張し、必死になつて登った。上りで

こんな苦勞したのだから、下りの事を考え

ると心配でたまらない。もうこんな所之度と

こないわと心の隅でかすかに思う。頂上を自

前にし一歩一歩慎重に登る。体調の不守は緊

張のあまりにどこかえふとんでしまった。

頂上からの高専山、西岳の眺めはバックグ

ンにいい。下界のなかも墨絵で書いたような冬

景色で、このまま持つて帰ってみんなに見せ

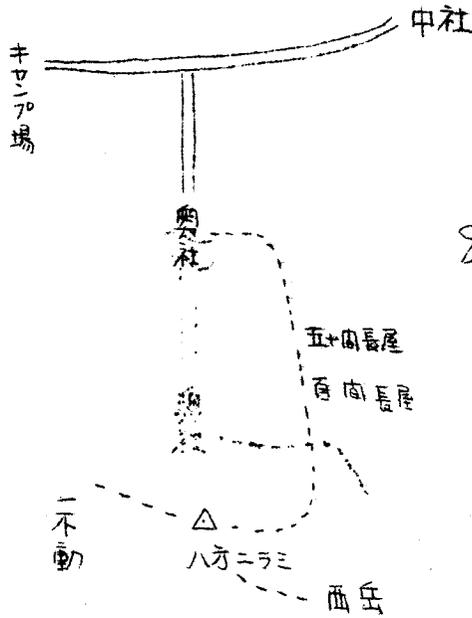
てやりたい、なあんていう気を起こさせる。

下りの難所は鎖場である。ザイルを使、ての

最初の懸垂下降はバランスを保つのがやっと
だった。二回、三回とやるうちだいが調子に

にのってぎて、おもしろみが出て来た。急な
斜面でシリセードをやり止まらなくなった。あ
れをく、たりもした。采る時の不守をよそに
今度はいつ采れるのだろうかと思いつつとげ
とげしくそそり立っている戸隠山に別れをつ
げた。

池田洋子



最近読んだ本、
先日、本屋で「Q&A登山学」と
いう本を買った。読んで考えさせられ
た事は、私は山について知らなすぎた
という事と、山に関する本を自分でも
数多く読んだつもりであった。
だがしかし、この本にのっている問題
の半分も解けなかった。残念。
本のまえがきにもあったが「広い教養と
して、山登りを業しむ基礎として」と
あったが、今まで山の凡庸書等ばかり
みているに読んできたことが失敗だった
けれど知れない。
当分としてそのような方面の内容
で学習をしたい。事務局長殿へ、
この本にある問題くらいかんたんに解
けるようになりたいものだ。

吉不博明

12月定例山行報告
杉本敏広

12月定例山行は、会として始めての冬山訓練でしたが、10名もの公員が参加しました。

8日9日と天候にもめぐまれ、全員、無事、山頂にたつこともできました。しかし、私達の冬山はまだ始まったばかりです。計画の「はじめに」でも書きましたように、まだまだ技術的にも考え方の点でも未熟です。今回の訓練では、3つの目的、目標をかかげました。そのうち(1)と(3)については、当初の目的を達する事ができたと思います。しかし(2)の「山についての考え方など広く意見を交換する」は、まだ不十分だったと思います。それは意識的に追求しなかつたからです。氷からの山行ではモツと話し合う事が必要ではないでしょうか。

以下、リーダーとして気付いたことをいくつか述べたいと思います。

1. ラッセルについて、越後の山は雪が多いので有名です。特に冬期は、ドカ雪という形で、たくさん雪が一昼夜にふる事が

あります。ですから、ワカンを付けたラッセルは、冬山の基本的技術の一つになります。

7日に入山した者は、4名という小人数でしたので、何回となくラッセルの順番がまわってきて、相当の訓練になったと思います。その点、8日の入山者は、多少訓練不足に終わったのではないのでしょうか。

2. 雪の上を歩くことは土の上を歩くのと、歩き方が多少ちがいます。雪の上の場合常に「足踏み」が必要になります。前の人を作った足場に足をのせる。それだけではだめで足場は「くず水」をまいます。自ら、もう一度足場をかためる事、即ち、かを入れてケリ込む事です。これはワカンを付けている時はもちろん、アイゼンの時も同様です。常にキックステップの要領で歩くことです。

3. 今回はアイゼンは、頂上からの下りにつけてみました。本当はなくても良かったのですが、訓練に付けたわけです。アイゼンをつけた足の感覚と、ワカンの時とのちがいを感じてもらえればよいと思います。

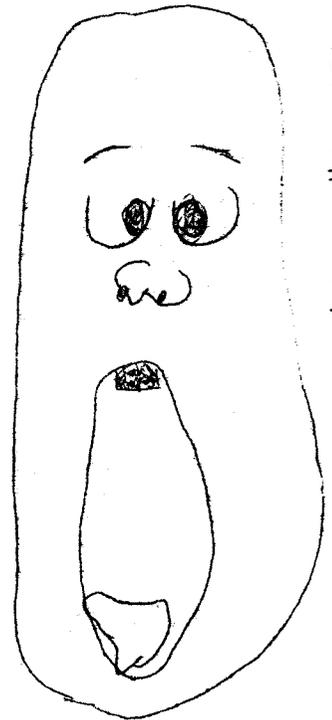
4. ピッケル操作については、ラッセル

アルプス
一万尺

- ・アルプス一万尺小槍の工で
アルペン踊りをサー踊りましょ
ラン ラララ……
- ・お花畑で 登 寝をすれは
ちやうちやがとんできて キスをす
- ・一万尺にテントをはれは
星のラニアに手がとどく
- ・お花畑で てるねをすれは
かわいいあの子の 夢をみる
- ・槍は穂高は かくれてみえぬ
みえぬ あたりが 穂、穂高
- ・槍はムコ殿 穂高はヨメ
中でリニキの焼か糸
- ・槍と穂高を番兵に立てて
裏島めかけてキミを打つ
- ・きのう見た夢 テリカイ小さい陸だま
のみかりユックはあて 富士登山
- ・いのちをいさげて 恋するものに
なぜにつめたい岩の肌
- ・ザイルがついで 穂高の山へ
明日は男の 後胸だめし
- ・名残りつさない大正池
また見かえす 穂高糸
- ・まめで あいましょ 又来年
山で 桜の咲く頃に

の時にしか利用しなかつたのだから、
ちやうち、冬山とはいってモ下界にいる時に
やれることが、いや、やっておかすればな
らないことがなくさんあります。ピッケルの
持ち方とか、ワカンの、アイゼンのつけ方と
か、その他、装備の兵隊は十分やっておくこ
となどです。

以上



おまえ、テリカイ声でうたえよ！

（12月7日）久しぶりに汽車で出発。妙高々原
駅につくとバスはすでに発車の準備をして待
っていた。刃の平の終点で下車し、準備をと
とのえて出発。リフトは全くだめかと思っ
いたらヤーリフトが動いているではないか。
ヤーリフトの発券所のおばさんにきいたら、
動いているのはヤーリフトだけとのこと。そ
れにしてもよかった。と思ったのもつかの間
大変な苦しみが待っていた。荷物は重いし、
風は強く冷たい。この厳しい試練に耐えぬき
りフトを降りた。た。たの15分が何んと長く
感じたことか。

これから長いラッセルが始まる。雪はヒサ
上10m位。スキー場のま。ただ中に一本のふ
み跡がほしる。それは自然にいとむ登山者の
生の証（あ）へしるしだ。

取雪はいっこうにやみそうもない。長工の
赤旗が残っているがトレースはない。先週
の日曜日あたりに登ったのだろうか。雪の量が
多くなり、ハックをおろしてラッセルだ。そ

れでも腰のあたりまである。ハックを取りに
もどると雪でまっしろだ。

やつとカナメに出た。案内板は同じ位の雪
だ。約2mか。ここからは斜面を切り開いた
道だ。雪が深く胸まである。時々雪崩がある
が小さいのでさほど危険はない。

ふと振りかえると、数人の男達がやってく
るではないか。それも我々が苦勞に苦勞を重ね
ねてつくってきたトレースの上を衆々と。頭
にくること。4人集まったところで大休止。9
追い越させた。あとは彼らにラッセルをして
もらわねば。苦勞は共にわかちあうところに
良さがある。話を聞くと砂防工事の人だ。
河原から再びラッセルが始まる。こんどは
斜面も急だ。15m位やってハックを取りにも
どった。再び追いつくと、古木君に替った木
島さんが小屋がみえたといっている。もうあ
たりは暗くなり雪面の凸凹をみわけるのがあ
つかしい。最後のひと頑張り、やつとヒュッ
テについた。今日は小屋に入ろう。

コースタイム 尾根の頂上から下りて来た(8:40) ↓
オキリフト(11:40) ↓ カナメ(13:30) ↓ 河原(15:00) ↓
大赤ヒュッテ(16:55)

位月8日)よく寝た。外は晴れているらしい。昨夜の雪で積雪はまた増えている。

ようやく出発。天狗堂下の物見を指して登る。うさぎが一匹足音におどろいてとびだしていった。空は曇一つない晴天、春のように暖かい。眼下に野尻湖が鏡のように輝いている。

トランシーバーをもっていった古木君が、11時の交信で「天狗堂だ」といっていた。まだ半分もきていないというのに。それにしても後発隊はおそい。列車がおくれたとかでまだそんなに進んでいない様子だ。

天狗堂へは出ないで直接光善寺池をめざすことにした。斜面は急になり、ラッセルがきびしい。大島君が雪底状の斜面をのり切った。光善寺池は雪でうまっていた。道標もつまり、大島君がいくら探してもみかからなかった。30M位の積雪か。

13時の交信を終えて下山。下りは早い。スリッパをくずさないようにおりる。明日のために。

ヒュッテではすぐ昼食の用意。まずラーメン、そしてシルコ。よくたべた。それもそのはずもう2時すぎだ。

木島氏と大島君が小屋内をかたずけることにし、小生と古木君が下へ後発隊を迎えにくことにした。河原につくと、丁度後発隊も到着。長野山岳会の8名(男4女4)も一諸だった。カナメからは全くトレースはなかった。たそうだ。

昨日は4名だったが、今日は10名だ。2張のテントを張った。先発隊4名は新テント、後発隊6名は旧テント。テントを張り終るころより、また粉雪が舞いはじめ、食事がすむころには30M位にもなった。トレースはどうな。ただらうか。心配だ。

コースタイム ヒュッテ(10:30) ↓ 光善寺池(12:30-13:15) ↓
ヒュッテ(13:30) テント設置(15:40-17:00)

（12月9日）冬の山であつて風はなかつたのは拾めてだ。小屋から借りてきたマットレスが下からの冷気をささぐり暖かかつたのだらう。

食事がすんでから出発までに時間がかかりすぎる。始めてだから仕方がない点もあるがそれにしてもおそい。

雪はやんだが、風が強くなすがかかっている。昨日のトレースは案の定消えてしまつて夏道を行こうとしていたので、まっすぐ行くよう指示してやつた。始め後についていたが、めんどうなので追いついてしまった。結局8人でラッセルすることになった。老善寺池へは昨日の半分の時間でついでしまつた。18人のラッセルは人数が多すぎる。トツプがラッセルで苦しんでいても、うしろはそれがみえないため、また繁なため、口笛や歌がでる始末だ。かといって別ルートを取るわけにもいかない。やはり8〜10人位が丁度か。

鎖場付近の積雪はすごかつた。斜面のせい

もあるが目の高さ以上のラッセルだ。小屋はここを20m位やつたが、次の田中君は5m位で交替した。それほどのだ。ほんの20mほどののだが。そこを通り越すと、あとは岩で雪も少ない。ワカンのまま頂上へ出た。日本岩付近で昼食。

下りはまづワカンをはずし、アイゼンをつけた。本来ならば必要ないところなのだが、訓練のため岩稜を下つた。アイゼンの感度を身につけてほしいものだ。

あのラッセルで苦労した鎖場付近は、快進な反制動だつた。斜面が急なため、素直らしいスピードだ。

ヒュッテまではアツという向についた。ただちに撤収。下山。トレースがはつきりしているのが早い。

池の平はもう暗かつた。十五夜の月が米山の上にあがつた。全員無事、御苦労様。

（コースタイム）ヒュッテ（7:30）↓老善寺池（8:00）↓山頂（8:40）

（8:45）↓ヒュッテ（14:10）↓カサメ

（15:50）↓池の平（17:10）↓妙高之原

（18:10）↓高田（19:30）

終り

なぜ山に登るのか？

昔、ある人が「なぜ山に登るのか」と聞かれて、「そこに山があるからだ」と答えたという。我々が山に登るのは、果たしてそうだろうか。

確かに登山をするためには、山がなければならぬ。だからといって、

「山がそこにあるからだ」ということにはならないだろう。

文化は、それ自身が目的ではなく、それを通じて、「生活を豊かにしよう」といふ意欲をもち、文化の一形態であるスポーツは「体と心をきたえる」ことにより、「よりよい生活を築く」ものである。いずれも、明日の力を養うために、明日の奮闘のために成りかわるのである。

ところが、こうしたスポーツが最近一部ではショーとして、金のために勝負をこなす。勝つことだけがスポーツの本分であるかのように宣伝されている。「勝つことよりも参加することに意義がある」といわれるオリンピックでさえも、メダルの数が肉體にされる始末である。そこには、実際に体を動かすスポーツではなく、「見るスポーツ」の繁栄がある。

こうしたスポーツ界全体の風潮は、登山界にもおよび、「記録者主義」として、一方では「金と名誉」のために、他方では「山で死ぬのが本望だ」といふようなあらわれ方をしている。山は、金や名誉や地位を得るどころでもない。山は、生命を授け出すところでもない。山は、「体と心をきたえ」「生活を豊く」ための道場である。

「山を征服する」という考え方が、いったい、「山を征服する」とはどのようなことなのだろうか。我々は、「体と心をきたえる」ために山に登るのであって、その結果として、頂上に立つことも多い。スポーツは、その結果と共にその過程を大切に重んじる。即ち練習方法や社会生活の中での成長、パーティ全体の規律や団結などの深まり。従って我々にとって、頂上に立つことのみが、成功のターゲットではないのだ。その山行に参加した個人又は、その個々の集まりとしてのパーティが、その山行によって「どれだけ、体と心がきたえられ」「どれだけ成長し」「どれだけ団結が強化」されたか、が成功のターゲットの指標でなくてはならない。

頂上に立つことと、山を征服することとは、全く別のことからである。自然を征服するとは、人間が自然の法則を知り、人間の力で自然を改造し、人間生活に役立てることでありう。

スポーツは、あくまでも「体と心をきたえる」ために行うべきであり、いついかなる時も、そのことを忘れてはならないと思う。

正月山行をふりがえって

「こぼし山の会」のこの一年間、杉本敏広は、技術的にも、組織的にも、様々な面で大きな発展をした年でした。生まれればかりで、ヨチヨチ歩きだった会が、この一年間でようやく山岳会といえるところまでできたのです。六七四年の年初に、冬の北アルプスに入山できるとそれが考えたことでしょうか。へもちろん行きたいという希望はあったでしょうか。「三山縦走がせいせいと思っていた人が多かったにちがひありません。それがたつた人とはいえ正月に北アルプスに入山できるところまでできたのです。

それでは、この発展の力はどこにあったのでしょうか。それは、第一に、会として目標をもち、そこに接近するように努力してきたことです。「雪山訓練教程」を作ったり、それにもとづいて、12月7日の戸隠山、12月定例の妙高などで実際の技術訓練を行なわれたり、天気図のとりの方の練習などの努力によって一

定の力量を身につけてきました。そしてオズには、会員それぞれが、山行を通じて、何かを求め、学ぶという姿勢が強まってきたことでしょうか。ひとりひとりが山行に目標と目的をもつようになり、山に対する考え方が変化してきたことです（もちろん無意識的な場合もあります）最後は年商を通じて、入山回数、入山日数が圧倒的に増えたことでしょうか。私達の今回の山行は冬山としてみても、極めてゆつくりとしたペースのものでした。（初めてということでも余裕をもたせたわけですが）それに北へ行けば不帰キレット、南へ行けばハッ峰キレットという所の丁度中間の比較的楽な所を歩いてきただけでもあります。しかし、冬山、北アルプスです。西高東低の冬型気圧配置から吹き出す北西の季節風は越中側から信州側へ吹きつけ、時々強風がザックをゆすぶったし、大黒岳へ下る凍りついた岩稜や、白岳の登りでのルート採しなど、身をひきしめる場面もいくつかりました。

しかし、最初の冬山としては、ゆっくりとしたペースではあったけれども、私達の力量からみれば丁度よい計画だったのではないでしようか。春や夏、秋の山は一人でもいけます。冬山だ、て、一人でも行くことはできます。しかし、登山は特に冬山は集団の智慧と相互信頼、援助、さらに仕事分担とその確実な遂行によつてなしとげられます。これが、たとえ力の弱いパーティでも、突り多く、有意義な、しかも安全な楽しい山行の基礎であり、新たな発展の土台を築くのでしよう。この山の会員は、かつて一匹狼であつた人が多く、その頃の「アセ」を持つた人がいます。それが集団の山行を通じて、良いものは生かされ、悪いものが棄てられ、全体として会員個人も成長してきているのではないでしようか。また、四日間の共同生活を逼り、特に、夕食後の語りの中、互いの人柄、性格を知り合い、親睦を深めることが、できたとお思います。今回の山行は、春山、五月連

休山行へと続く、雪山訓練のワンステップであつたわけですよ。山行のほとんどがトレースの上、新雪の上、岩稜の上、マクゼンのつけばなしでした。「百円は一見にしかたげようやく、マクゼンの感覚がわかつたのではないでしようか。冬の山は、他の時期とちがい、いろんな所に「こわさ」があります。安全に楽しく登山するには、この「こわさ」にどう対処するかが、重要な要素になります。心置きにはパーティ全体の力量、疲労度合、天候などによつてちがつてきます。そのため多少難かしくても通れる場合もあれば、簡単そうにみえても通れない場合も出てくるのです。その所で見きわめが大切であつて、「こわさ」は、決して「バジ」ではないのです。最後に「し」としては、まだまだ未熟な十分な任務を果たすことができませんでしたが、事故もなく無事全員山行を終える事ができたことを喜んでいきます。下山の金平、名呂屋のパーティ、ヤ大阪のみなど、山など、私達の仲間、テニト村をみて、たのもし、い思ひをしました。私達も、やかつては、彼らにまけないようにならうては、ありませんか。

唐松岳と五竜岳 正月山行

計画は正月休みを北アルプスで過ごす事であった。

ホー一日目、12月30日

朝、天気が良くなると思っていたが白馬駅に着くと雪……、駅には他リパーティイモリテラツセルの心配が凄いと思うと気が乗らない。バスがこない。こない……スキートの車が混んでいてバスが遅体になつてしまった。何人という事だ、駅前で肉まんじゅうを腹につめ込み出発。ケーブル駅まで如分車に気を使ひながら歩く。ケーブル駅もスキー客でい。ぱり長り列のうしろに……リフト上の展望台で朝食、ストーブの囲りでおにぎりをバクッと、展望台では長野山岳会の人達にあう。今日に入って妙高、戸隠山、そして今日、三回目り対面だ。彼せらがものすでたくましく見えるの……から本当の冬山、曇っているので囲りが良く見えなすが、足に伝わる雪の感じは北アルプスを登っている事を私に伝える。今日はバスで午間どつて時間があ

く水たので八方山ケルンでテントを張る事になった。二番目に我々の会のテントが張られたがそのあと次々に我々の囲りにテントが増えていった。

夜はカレライス、酒をのみ今日の事、山の事いろいろと話がはずせ、歌も出る。時々強い風がふきテントをゆさぶる、8時、もうおるぞ、あやすみ、シコラフにもぐり込めと軽いつかれがゆめの世界にひきこむ、サテ彼女のゆめでも見るか……

古木博明

コースと時間

白馬駅(11:10)→ケーブル駅(11:50)

→リフト展望台(12:10)→三回→八方山ケルン

(3:00)

ホー二日目 12月31日

初めての冬山登山のつかれとウイスキーの飲み過ぎで朝までグッスリと眠られた。

朝、目がさめたらK、Sさん二人がまだ横にねていた。シユラフをかたずけて朝の食事に使う雪を取るためにテントを出たらすごい

凧で体が凍るようであった。雪も降り、朝食を
 作っている。朝食が済んだら、雪はなまってよう
 やく先づきの二人がおきて自分達のリュック
 をかたづけけている。みんなでテントの中を
 整理して、朝食になった。朝食をたべながら
 リーダーのふさんから今日の行動の説明があ
 りました。予定としてはオケルンから唐松
 小屋、ここでテントを張りそして頂上はアタ
 ヅクするとの事。朝食をたべおえても凧がや
 まず出発が多少おくれと時々分に出発。

トレースが悪いうえに凧が強いため私は徐中
 でダウン、K、Sさんにはげまされながらオ
 ケルンについた。一休みしていると下のオ
 から女性の混ざっているパーティーが上って
 くるのが見え、女性がいるのには私はおどろい
 た。オケルンから小屋までの道もみんなに
 はげまされ(シゴキかも?) どうにか無事に上
 ることができました。11時分

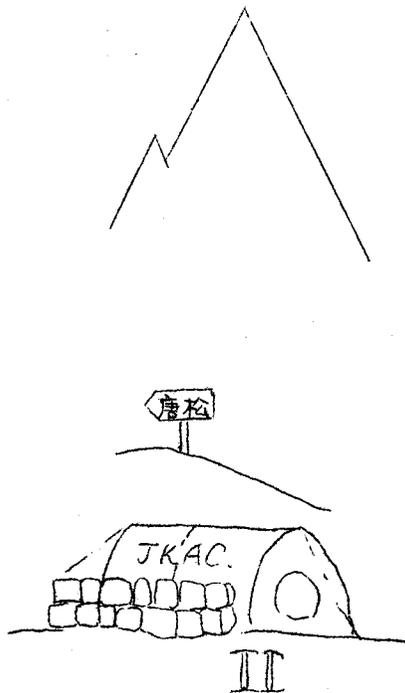
唐松小屋の附近でテントを張り、雪の
 フロップをかためた。すぐにテントに入、て
 朝食を食べ、外に出た、アイゼンを付けて唐

松頂上に向けて出発、凧が強くけわしいた
 め登るのにたいへんだったが、ついに頂上、
 頂上は凧がすぐくともいられる状態がなく
 じいじい、援けを要する下山した。

テントにもどり食事の用意をする。その夜
 はテントの中で今日の登山の事、彼女?の事
 その他いろいろの話がウイスキーにふられて
 出た。時のたつのもわすれてしま、た。

私にとって今回の登山は最高の思い出に
 なると思います。 茅沢喜久男

コースと時刻
 ハネ山ケルン(8:15) → オケルン
 (9:10) → 唐松小屋(11:45) →
 テント設営 → テント(10:05) → 唐松
 頂上(2:25) → テント(2:45)



北岳一九七四、一、一、寝袋の中での自由自答

今日の行程は非常に苦しかった、特に吹雪でスリッパ先が見えず、信州側への大きな雪庇、そして初めての厳冬期の岩場でのルートファイティング……しかし、代々はただ苦しかっただけでなく今日の山行を終わって良いものであろうか？、今日の天気、岩場は厳冬期の北アルプスならば当然立ちほだかるものであり、北アルプスといっても入門用のコースではないか、将果は厳冬期の槍、穂高等としてピマラヤを指すものがこれくらいのもので、あざむいてはどうする、サア元気を出して今日の山行の反省をし、明日への糧としようではないか。

と、厳冬期には一度もきていなかっただけである、しかしである、それだけの理由だけなのであろうか、もしもそうであるならばピマラヤ、あるいは他の山には絶対行けなくなる。(誤解を招くための断わっておくが残雪期、あるいはその他の季節には行くなとはいわない、やはりより安全をきずるための行くのは当然なのだ)それ水でも存おかつ冬山に行こうとするならばまず地図をひき行い、実際の山と地図上の山の相違、ならびに現在どの位置、どの方位、どの方向に向っているのが常にあるのか、頭の中に入れて、そして冬山の場合、常に生と死とはとなり替わらせて生きているということを思いそして行動しなけ水はならないのか？、また、他人のラッセルを安んじに受けいれて良いものであるか、たしかに他のラッセルのあとをたどるのは乗であり、休の疲労も少ない、だが、そのラッセルのあとが死の道である、たなら……へそのラッセルのあとが周囲に近く私の目的地向かっている水はよいが私は考えただけでもぞっとする。これは考え

昨日、五竜山荘の所にテントを張り五竜にア
タツクの予定であったが天候と時間的にむり
という事で明日に見送るといふ事になつて
いた。

まだ明けやらぬうちに朝食をとり旅備を付
けて明るくなると同時にテントを出てアタツ
ク南嶺。朝の天候は昨日と同じに強風が吹き
あれている。私達の名は風にあおられながら
五竜へと目指す。風が強くて目をあけている
のかや、と、早いペースでグングン高度を上
げ何がなんだかわからないうちにもう五竜の
岩場の所に来ている。ここで足をすべらせた
ら大変なことになる。ここで足をすべらせた
岩場の所を登り切った。こんどは頂上直下の
急斜面、前の人の足場をしっかりと心みかた
めながら登り、少し行くと五竜頂上である。
山頂でまず、仲間と登頂成功の握手、二八一
四山の山頂からは何も見えず、ただ強風が私
達に吹き、ケ、ヤツケが白くなっている。カ
メラが凍ってしまいシャッターが切れなくな
りた。頂上に「おびし山の念の三角旗を立てて

記念写真撮りすべしに下山。私達が下山の時
に他のパーティーがたくさん五竜アタツクに上
つてくる人達がいっぱいだ、テントに着く、
下山の準備を整え遠見尾根下山である。白岳
を登り切ると天気がだんだん良くなり今アタ
ツクを終えたばかりの五竜が姿を見せ、夕日
必りで、太陽さんが顔を見せてくれた。白岳
を下って行くぬと竜が素晴らしく見える場所
にきた、夕日目にして写真が撮れた、シャツ
タリーの切る回数もグンと増え、遠見尾根が色
あざやか人間でいっぱいだ、テントもたくさ
ん張られていてこれも色あざやか、中には私
達と同じ嶺山の仲間のテントがえくさ張りあ
った。私達はのんびりと遠見尾根を行く、神城
城のスキー場の中をズダズダ歩くのも気持ちの
いいものだ。

無事にこの山行が終えて本当に素晴らし
い思い出となった。

小倉泰治

コースとタイム テント(ク、00) → 頂上(ク

50) → テント(8、40) (巻) → 神城(

)

あわが水の記

入村晶子

この程、生ませたこの方八年と5ヶ月、
二のように住みついた高田から離れることと
なり、非常にづらい思いをしています。

思えば、小学校四年の時に初めて山へ連
水でいってもらった時以来、男の人でもない
のには山の神にとりつかれ、フラフラと山道を
歩いてきたのであります。

ところが……あれはいった、たでしよう？

そう確か一学期も終り頃のある暑い日、私は
成績表の数字を思いうかべながら、ノエノエ
(イキ、ニイ、イキ、ニイと読む)とシヨボクして歩い
ておりました。すると、心と目に止まったの
が、ナント。すばらしいポストターに、奥穂高
登山をしましょうと書いてあるではあり
ませんか！ワタシヤ、気がいいので○しま
しよう、と言われるといいその気になり、そ
うしまししょう、というので勝手に自分で議
を決め、即・連絡の「E」をしました。返事
はもちろん(？)味がありました。奥穂高は天気
もこの水以上晴れわたらないと思う程よく晴れ
、澄みわたる、予想以上のすばらしい山行と

なって私の胸の中に残っています。

その後、雨飾リへ行つてからこぶし山の空
に八公させていたことになったわけです
。以米、いろいろなる山行の計画がありました
がやば用があたりで、なかなか思うように、
山へ行くことができませんでした。それでも
ボクボクと山歩きができたのも公衆の善様の
暖い気持で指導をいただいた御陰だと深く感
謝しています。

去年の秋に頸城三山へ連水で行つてもらつた
時、赤いナカマドの実をとってきました。
それは今、戸棚の中で焼酎に漬かっています
。今度皆様と会う時にはこれをグイグイ飲め
るようになり、特に○さんとは盃をかわした
時にも負けないでダイアツアできるようにな
りたいと思っています。

春ですので空の中もあめでない話が盛んで
あり、山もいよいよそれからシーズンです
がくれぐれも体に、足元に気をつけて、安
く、楽しく、安全にのモットーで山行を説けて
下さい。短い間でしたが、楽しい思い出ば
かりをザツクに話めて、新しい生活を始めよ
うと思えます。

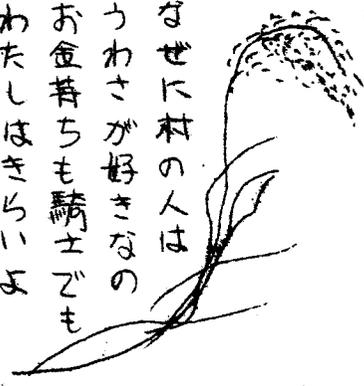
オタツシヤで……

昨年の秋 松岡 健一

昨年の九月生まれで初めて稲刈をした。東
 際言を待ち刈り取りをしたのだ。今日はどこ
 農家にも機械化が完全普及した。ハロウもす
 るコンバインも天同調入する様にもなつた。
 稲の収穫期も一〇日もあれば片付く様になつ
 たし、正に農作業にも輝しい文明が入つて来
 た。だから稲刈を手伝つてくれと頼まれた時
 一体何をするのかと考へた。当日出向いてみ
 ると果して機械の道入出来ない場所があつた
 。稲が倒れている所、稲株三本程度の四隅だ
 った。初めてのここのなごうまくゆくのかと
 心配したのだがさう気を使うこともなかつた
 。鎌にかかる稲株はちようど手応えが有りそ
 の刈音は気持ち良い程自分をスカットさせて
 くれた。自から着け込むこの雰囲気はどれも
 これも稲を主とした自然の情緒とそれに従事
 する人々の生活の一面、そして米を作るとい
 う尊さの精神的感情が少なからず段けたのだ

った。秋特有の澄んだ青空は稲穂に一層その
 輝きを持ちたらし正に黄金色とも言える。紅葉
 にはまだ早い周辺の山容が静かに豊かなこの
 大地を見下している様だった。昔のように乗
 早く夜遅いこともなくなつた。了らうが一段落す
 るまでは、自分達が終つてもまだ儼けること
 だらうと思ひますが衰れた気分で帰つたのだ
 った。

百姓娘



なせに村の人は
 うわさが好きなの
 お金持ちも騎士でも
 わたしはきらいよ
 明日の私は
 ブラドの花嫁
 ブラドは働き者
 お百姓 ハハハハ ハハハ
 お嫁入り ハハハハ ハハハ
 うたえよ 踊れよ

原田さんの事

私が最初に逢ったのは高谷池、
 一目、見た時、その顔に火打の山のよつなす
 げうしこを見た。

やさしい、やさしそうなその顔に。

「原田さん、あのろくの若人日采ますか？」

7月9日 日曜日の午後、ジュンテの前であのろ

くと原田さんと私と、お茶を飲みながら話

下事、

私はまだおぼえてります。

山の事、

ライキヨウの事、

又、火打に采たいという事と、

「小屋は泊るなう、おぼんの15日に采らせい

小屋の前で大きく存いけどキマンプファイヤ

ーをやるからと、

それを回んで、酒そのみ飲もうな、と、

そして話して、

行こう、行こう、と思ひながらとうとう行り

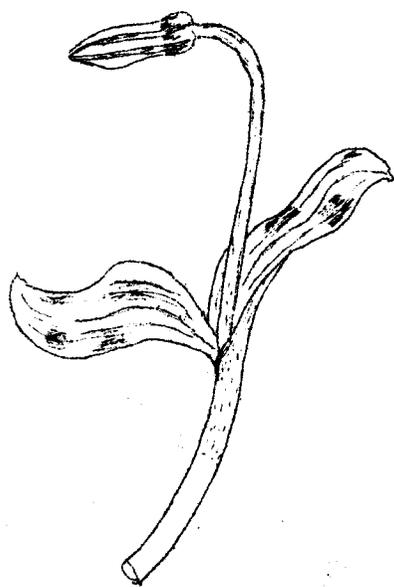
なかつた。

私屋を回らわち顔がとても下きだつた
 きて、その時から火打の山が大きいになつ
 た。

……高谷池ジュンテリ新しくなつた。

火打待たせぬの西は、小屋が思ひ出さ水る

……



kazako.

去る人、一口

ワタシヤ、ふてくさ水で丹沢の水を汲ん

できて、ヘソで茶でも沸かしませうか

ネエ!

入村

永年の正月

八不眞淨了

。昨年は永年のお正月こそ家で過ごすと思っ
ていたのに、何処か又いつもの調子で出るこ
になった。昨年は苦しい／＼で迎えたお正月、
今年は少しは阿蘇の大自然の中で、のんびり、
ゆとりを持って歩けたら……と思ひ、昨年に続
いて福岡ユース協会主催の九州横断徒歩ホスに
参加した。行つたらついでに休暇を取り、少し
回ることにして、12月25日すこい雪の中へいつ
もの行ないが物を言うのでしようか、予定して
いた汽車が運行され、あとは運休。家に帰って
五分ほどであわただしく飛び出し、瀕り込ませ
しつ。後はどうにかして徳山へ、そして船で竹
田津へ伊美のコースへ。途中みかん畑が沢山あ
り、みかんの不好きは私ばかりか、つ矢敵。そ
のひとつがとてむ甘くおいしかった。でも良心
がとがめ、ひとつで我慢。それだけが今では少
々心残り……。国東では2泊してのんびり夕く
の石仏を尋ね歩きました。

海がきれいで、人海が素朴で親切……。ととて
も良い所。又校友会があつたら是非行きたいと思
います。

12月28日、国東から石仏、鹿産仏を見ながら
別府に出て一泊。ここは三度目なのに観光は全
然してなく、もっぱら喫茶を回り、ユースに温
泉があるので泊るのです。

12/29、荷物をユースに置き国東の寂れが出た
ので、どこにも寄らず、博多まで切符を求めて
直行。でも残念ながら無理であきらめ、福岡ユ
ース協会にて横断ホスの仲間と再会。そして食
事、パチンコをして瀬へ一日何もせずしま
い。でもこの日は気分的にとっても寂れた一日でした。
今考之ればゆかいなことですが、完歩できるか
どうか心配で、別府では眠れず気が立っていて
何を聞かれても身に入らず、話しかけてくださ
ったホステラーをおこなせてしまった程でした。
それも博多で懐しい友の顔を見て「ホッ」とし、
不安も少しは消えました。ルノワルユースで夕
食後経団式が行なわれ、その後参加者40名の自
己紹介が行われ、皆んな私と同じように、
「不安でない、ほい」と付け加えていた。
12/30午時。いよいよバスにてユースを出発し
熊本城へ。去年はすばらしい夜明けだったのに

今年は道の端に雪が積り、その上雪がららつき
一段と寒さを感じました。11時、準備体操後、
一勢に河蘇コースへ19時制限目掛けて出発。
49Kに挑戦。二度目の道だから気分的に楽に歩
けたように思う。でも、もう20K位のところで
息が出来てしまった。なるべくひきづらぬよう
にして歩くことにした。河蘇の山はサバパ
と目の前に崩れる竹へ行っても見えない。はた
なレに人家をスケッチへこのスケッチは一日一
枚、それに三日で原稿用紙2枚以上のレポート
と歩きながら書き、提出しなげればならない。
30Kキエックを休憩をとらず12時25分通過。因
道に出た後と二人で左手にVサインで進む。こ
れから三日間こうして退屈しりきに歩くのです。
前に歩く人達がすべに行なっているとは車の方か
らVサイン。こうだとおもしろい井がなくな
ります。熊本県警のお巡りさんのVサインをし
てスローカーで励ましの言葉には驚きました。
最後に単調な道を10K。16時45分無事へ7分刻
着。ユースの少し前で鉄力くいに石足力親指と
が、つけて爪がほつそう。その夜は豆つぶしに

専念。私なんて良い方で足の裏全体に出来て
いる人もいる。その時男の人泣くんだな
ー、て：、始めて涙を見ました。

13引、もちつき之音で田をさまし、直ぐ窓
の外を見ると、今日も雪がちら／＼。でも阿
蘇の外輪山が見える。おもちを食べて9時エ
ース発願、本ユースまで29K（17時制限）。
今日は一番時局的に乗で景色が良い所です。
阿蘇神社にて記念撮映。明日の食糧、カッ
パンを購入の後10時発。少しの向急な登り！
城山にて昼食。阿蘇谷のながめは望めず、
スーッ午もせずに出発。雪がひどくなり、し
よぼ／＼単調な道を歩く。14時30分オニエ
ッ①にて集合との反力伝言で休憩。そこで寒
いからとフランドーを一杯腹を空へ。道路が
凍っていて滑りながら瀬、本へ16時22分着。
明日は歩くのに専念しようど部室の窓越しに
スケッチ王ニ枚書き少々う／＼くり。天悔日の
夜はキャンドルサービス、ケームと行なわれ
その後反とチベリンカ。気付いた時は11時。
まだ皆なテレビを見ている。それを横目、

ツドに入る。

11。オメデトウとは一人も言わずオハヨ
ウだけ。5時、真暗の中由布岳東登山口（17
時制限）を目標して出発。懐中電灯の明りが
ぼたろの森にみえる。長い坂道とむきになっ
て歩く。今日は52K、道草をしている暇はな
い。空をみるとお天気がよさそう。6時42分
（8K）枚ノ戸峠ではあたりがほんのり明る
くなり始め、美しい霧氷が見れた。二人で歩
き始めたのが六人になり、平坦な長者原を通
り水分峠までゆかいに歩く。すぼ／＼しく晴れ
上がり気分がいい。12時37分水分峠着。ここ
で食事とり13時30分出発。あと1.5K頑張り
なくてほと、又反と二人で歩き始める。空は
真青、白い帽子をかぶった由布岳がとても美
しく、スケッチをする事にす／＼同意。30分程
のち痛い足をひきずりながら湯布の町へ。こ
れからがだら／＼とした登り。一休んだ後は

足の裏が非常に痛く、歩いていた方が楽のよう
うです。途中カカトを折って歩くことを思い
つぎ即実行。とても楽になり、のんびり夕陽
を受けるながら鼻歌まじりで最後の何Kかを歩
く。16時28分エール。今年も130K無事完歩。
これでやっと楽らく、何より先に別府のお風
呂に入りたかった。木村理事長の言葉で「車
道を130K歩いたのだから絶対にヒッチはして
欲しくはない」とのこと。タクシীরの来るの
を寒い中30分程待ち、別府エースへ。

まず、お風呂へドボン。そこでやっと完
歩の実感が湧き、だれもいないお風呂場で大
きな声の歌を唄った。そして今日は一月一月
家で音んは何をしてるかな——などと少しせ
ん午になってしまった。そしてお風呂、食
後は玄廂に集まり解団式が始まる。理事長が
ら賞状と記念品を頂き、赤玉で乾杯。三日間
の思い出をにぎやかに語り、来年の再会を約
束して眠った。残念ながら初夢の見る余裕な
し。

1/2おとそとおやうにと一応お正月気分を
味わい、皆んばの見送りの中駄車で車で送っ
て頂き、友を見送って荷物と家に送り、昨年
同様高千穂へ向った。山の中で景色がとても
良く、そして静かなので私のとても好きな所
です。

高千穂で一泊した後、1/3 カツホ酒とい
ただき、バスにて高森へ、そこから悪気汽関
重にて立野へ、そして熊本から佐賀線で武雄
に出で一泊。12時頃までヤアレントと話し込
み、翌日は有田の をぶらつき、松浦線にて
平戸へ。真青な海に島々が点在し、気温は
温かく、家庭すべで豊様に感じた。ユースに
行ってまだれも居なかったので、荷物を置いて、
広い草原へ海に面した高台です。でボケ
——と子供達のたこあけを見ていた。もし
て、ユースに戻ってベッドルームに入り外を
見ていると見覚えのある顔が近づいて来り。
近くにきて、藤丸さん（九州横断ホスの仲間）
と知り、かけ下りて行った。私がここにきて

いる事を知り、ニ、三人まだ来て下さるとのこと、少々淋しくなりかけていた頃だけに、とてもうれしかった。話を聞いてみると、このペアレントも又5回に参加し、ヘルパーをなさっている方も参加した事があるという。藤丸さんは、みんな御存知でその夜は特別室を提便して下さり、又々、お茶、おかしを囲んで思いお話に花が咲き、12時頃まで夕べりンク。

1/5 平戸に渡り、一応ぐるーと回り、鯛茶漬を食べて長崎へ、指原に行けばと思、て行ったのですが、空ろうなんて程遠い話、立つ場所を確保するのに勢いっばい。東小な人達は、窓から入り、始めて帰着列車のものすごと味わいました。とうとう小郡まで立ち直し。そして、1/6 とうにかして、よし子さんのお迎えを受けて無事帰りました。今年も又自然の中で歩く事の素晴らしさと感じ「光あるうちに光の中を歩け」の言葉のようによろこびたいと思います。乱文にて失礼。

「山がすきだ」

吉沢春久男

俺みたいな体力のない奴まで、山は興味をもちたした。

山は、きつい

人間は、弱い人間は苦しくなるとにげる。

山はちがう、

どんな強い嵐や風が吹いてもにげない、

嵐に向ってデンと立ち向っている。

山は自然だ、

人間はちがう、か、こうをっけ、みえをはり

、うそをっく。

山はちがう、

ゴロゴロ岩だらけ、

か、こうは悪いが、みえははらない、うそは

つかない。

いろんな山は

俺の友達だ。

トレース

—— 妙高にて ——

杉本敏宏

真白な雪

まだ、だれにも

ふみつけられていない この雪

ピッケルを持った手が

胸までもある 眼の前の雪をつきくずす

左のヒザが その雪を押しつめ

押しつめられた雪を

ワカンをつけた俺の左足がふみしめる

再び ピッケルを持った手が

眼の前の雪をつきくずし

今度は右のヒザがその雪を押しつめる

そして 俺の右足がそれをふみしめる

葉を落として 黒々としたブナの林に

北西の季節風が吹き荒れ

吹雪は登山者達の顔に 腕に

体じゅうに吹きつける

ブルーのヤツケに ブルーのオーバースボン

黄色いオーバースユーズは粉雪で真白

重々しくたれさがった灰色の空の下を

真白につづく雪の原に

ふみがためられたトレースが

一歩一歩 伸びてゆく

胸まであるラッセルはつらく

10分とはつづかない

“スイ 交替だ”

うしろの仲間へ声をかけ

雪の中に身を投げ出す

“ヨシ まかせとけ”

雪焼けした黒い顔が通りすぎ

ラッセルをはじめめる

“ごくろうさん”

雪の中で

乱れた呼吸きととのえている俺に

他の仲間が声をかけていく

最後尾に付いた俺は

大きく深呼吸をとして

仲間の小片がためた道を歩きます

突然 吹雪がやみ

灰色の雲のあいだから 太陽が顔と出す

キラキラと輝く雪の結晶が

風にのって眼の前をとおります

夕ヶカンバの枝々に凍りついた雪は

春の花のように咲きほこる

黒い蓑袴が真青な空につきだし

冬の山の強さをみせつける

真白な雪

まだ だれにも

ふみつけられていなかった この雪の原に

銀色のトレースが

右に折れ 左に曲がり

あるいは谷を下り 斜面をよじのぼり

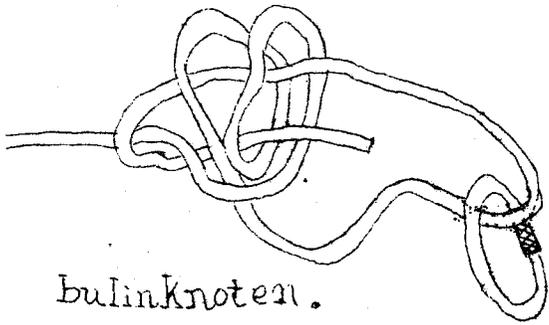
生きものののようにのびてゆく

真白な雪原に残された このトレースは

勇気に升ちた登山者達が

苦しく つらいラッセルで

自然にいどんだ力強い軌跡だ



bulinknoten.

ナダレ (雪崩) の分類

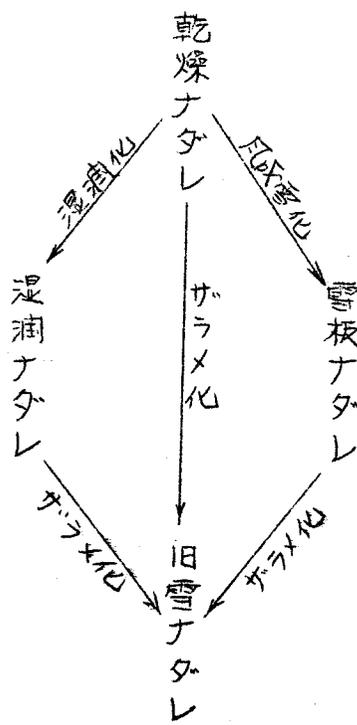
積雪期の登山をするものにとってナダレは常に頭の中に入れておかねばならないオーの危険である。このナダレについて少しのべてみよう。

1. ナダレの分類

ナダレの分類は、①雪の新旧を主とするもの、②成因を主とするもの、③運動を主とするもの、④原因を主とするものなど、研究者によっていろいろである。これは、ナダレの研究が、実相をつかんでその機構を明らかにするまでに至っていないためである。ただ、雪の新旧は、かうメ化したものと旧雪、それ以外の各種を新雪とすることでは大体一致している。

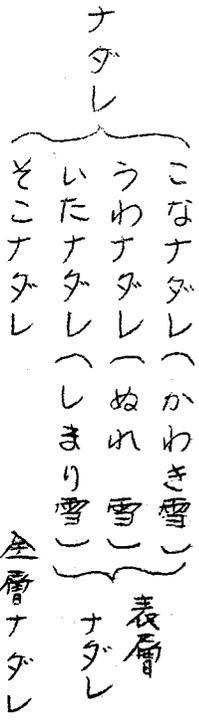
以下、代表的な分類を掲げる。

(1) 谷本 (谷本) の分類



典型的な4種類の雪崩と規程し、他はそれらの中間又は混合型とするもので、登山者にも憶えやすく誤解の少ない名称を工夫してある。

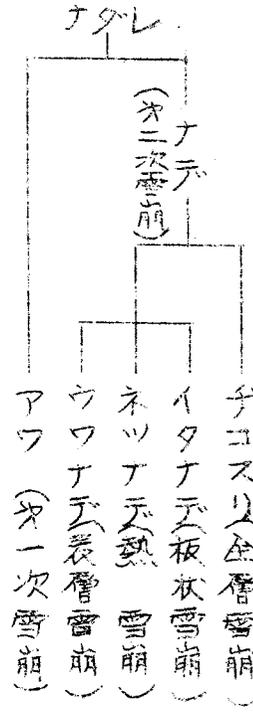
(2) 高橋喜平氏 (日本雪氷学会) の分類



いたナダレは主として風で運ばれ堆積したもので、即ち風成雪によって発生するものとされている。

日本では、表層ナタレの発生は、風雪の日
に多く、こびナタレといふナタレの中間型の
ものが非常に多い。

(3) 黒田正天氏(日本雪氷学会)の分類



① アワ 降雪がある深さ以上になると、何の
原因がなくとも自然に崩れおちるもの。
② ナテ アワがでないで一担落ちついた層が
その後の条件で崩れるもの。

③ ウワナテ シマリユキなどの上に積った新
雪が、積雪以外の力(雪底の崩落、雪球の
転落等)によっておちるナテ。

④ ネットナテ 安定したシマリユキなどが、日
射などによりヌレホラメユキとほり密度の増
大をまえることができず崩れるナテ。高山の

急斜面などで起りやすい。

⑤ イタナテ 厚い積雪層の表面がシマリユキ
などに硬く固まった後、下層が沈み、橋をか
けたようになり、それが割れて崩れるナテ。
⑥ ゴゴスリ 春先に全層がゆるんで起る全層
ナタレ。

2. ナタレの特長

表層雪崩は、発生の予知が困難であり、被
雪が予想外に大きい。全層雪崩は、積雪に雪
割などができてから発生するため、あらかじめ
め危険を予知することもできる。また雪崩地
域が毎年一定している。

《落下の速度》

乾燥新雪の上層雪崩	300 ~ 400 Km/hr
乾燥新雪の全層雪崩	100 ~ 200 Km/hr
湿潤新雪雪崩	100 ~ 200 Km/hr
旧雪雪崩	20 ~ 50 Km/hr

加納一郎著「氷と雪」より

新雪動機雪崩に於ける

(1) 雪質

厳しい寒さの時に降る粉末状で密度が低く、空気を多量に含む雪。山稜を雪煙をなして運ばれ、雪庇を作ったり、吹きだまりをつくる。風が吹きつけたり、気温があがると次第に落ち着く。

(2) 雪崩の状況

この雪崩は昼夜の別なく発生する。そのため最も困難が多い。全く自然的にも発生するが、雪面に刺激が加わった場合に多い。

まずかすかな割れ目が伸びていき、一定の厚さの板状の雪がすべりはじめる。新雪と旧雪の境界ではなく新雪の層の中にできる。

斜面の雪はその下部の雪によりかかっているため、もし下の雪が雪崩となって落ちた場合、引きつづき上部の雪も崩れることが多い。

この雪崩は急速度で落下し、一部は煙状を

出す。雪崩はあがる。この雪煙は、あつて大きなエネルギーをもち、みかけよりも危険である。

(3) 雪崩のエネルギー

雪崩はきわめて大きなエネルギーをもっている。それは、夏の大雨程度ではなく、ダムのはげみによる洪水の様なものである。従って、沃すじだけではなく、小さな尾根や台地は簡単にのりこえる。過少辞価は禁むつである。

(4) 気象

裏日本の場合は、西高東低型気圧配置の時の北西の季節風が多量の新雪を降らせた時におきる。東日本の山では低気圧が東進する時降雪が多く、新雪々崩がおきやすい。

(5) 判断

理論的に解明されていないので、積雪状態と気象、地形から判断するしかない。要は、すでに何度か雪崩をおこしている所では、過剰すぎる程の慎重さが必要ということだ。

あとがき

「こぶし」オニ号がやっと出来上り、我々機関誌係は一回「ホツ」にしていきます。

オニ号の時は、一年近くかかり発行して、オニ号からは三ヶ月に一回と心に決め取りかかったのだが、……、やはりまたおくれ……

原因としてまず、機関誌係の力不足でしょう。

それから会員の協力も上げることが、できると思いますが。次回からは、より一層良い物を作るために努力します。

会員の皆さんの協力をお願いします。

それから記録ですが、コースタイムは正確に、山行の時はタイム等は、他人まかせにせず、自分で書く様にしましょう。できたら各自、山行ごとに自分の記録をノートにまとめるようにしましょう。

春、四月、コタツは、しまつて書庫の下へお掛けようではないか

では又、三号で。



上越こぶし山の会 会報

新潟県上越市東本町5丁目1番38号.
杉本方.